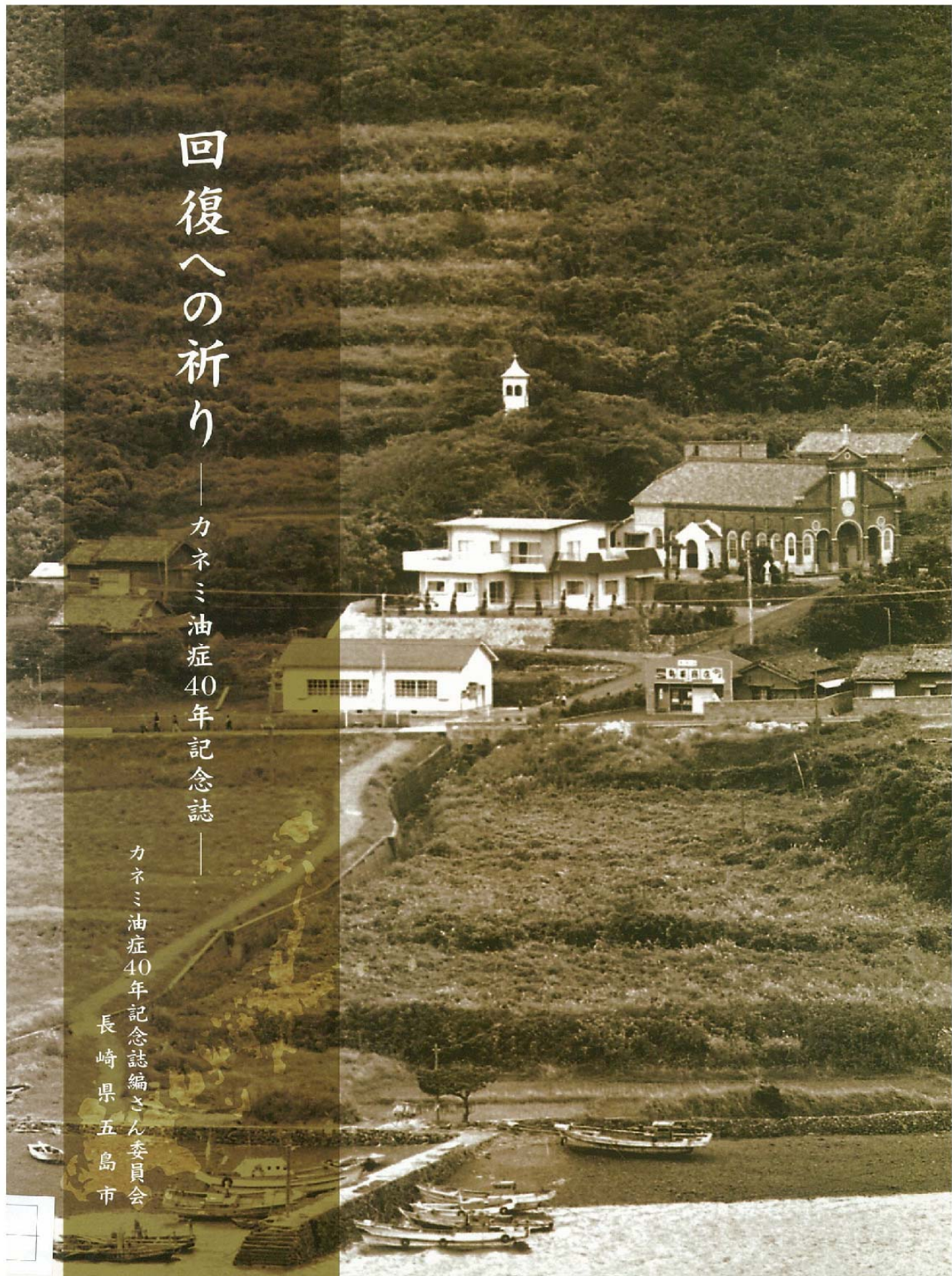
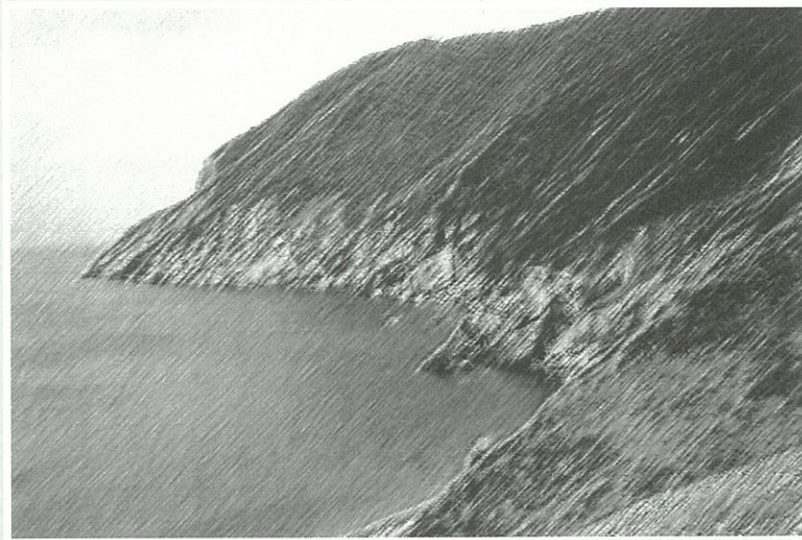


このPDF「被害者の証言より」は、カネミ油症40年記念誌編さん委員会（長崎県五島市）
によって発刊されました「回復への祈りーカネミ油症40年記念誌ー」より抜粋したものです。
ご許可いただきました五島市に厚く御礼申し上げます。
九州大学病院油症ダイオキシン研究診療センター長
古江増隆



第 2 章

被害者の証言より



第2章 被害者の証言より

カネミ油症事件について思う事

片峰 亨

私は8歳の時に被害に遭いました。そして、示談派です。私の父は私が4歳になったばかりの時に他界し、母親は女手一つで5人の子供を育てている中、被害に遭いました。当時一番上が13歳、一番下が4歳でした。母は食べざかりの子供5人のかかえ、その日暮らしの日雇い人夫などで生計を立てていました。

油症事件が発覚して、間もなくカネミ倉庫の社長が各家庭を訪問したそうです。母の話によると、カネミ倉庫の社長は、半ば脅しをかけ、少しのお金をチラつかせて、示談の話を持ちかけたそうです。まさか後々これ程までにPCBに苦しむとは夢にも思っていなかった母は、見たこともないお金をチラつかされ、なお半分脅され、それでも我が子に食べさせるために、やむなく判を押したのでしょう。その母は、41年間入院の繰り返しです。母の症状ですが、血圧が高く、ひどい時は上が280位まで上がり、痙攣を起こします。また、両膝が悪く、まともに歩くことができません。

私と言えば、小学校の頃からよく鼻血を出していました。いったん出たら中々止まらず、1、2時間止まらない時もしばしばあったのを記憶しています。そのため常に貧血で、たびたび倒れていました。その他、疲れやすかったりとか、腰のヘルニアを手術したりとか、数え上げればきりがありません。

話を41年前に戻して、油症事件が起きる数

か月前に、ダーク油事件が起きています。これは、西日本一帯で鶏が大量死した事件です。原因は、カネミ油を製造する過程で副産物としてできた油粕を、鶏のエサとしてやったところ、大量の鶏が変死した事件です。

このダーク油事件の直後、国はカネミ倉庫を立ち入り調査し、鶏の大量死の原因を、カネミライスオイルの製造過程で副産物としてできる油粕が原因であると断定したにも関わらず、肝心の人が食するライスオイルに関しては、聞き取り調査だけで済ませているのです。人の命に関わる一番大切な事を安易に処理した事は、国の過失と言わざるを得ません。この時、国がしっかり原因究明していれば、被害はここまで大きくならなかったはずです。この年、43年は全国で2千件近くの食中毒が発生していますが、原因究明されていないのは、カネミ油症事件だけだったそうです。

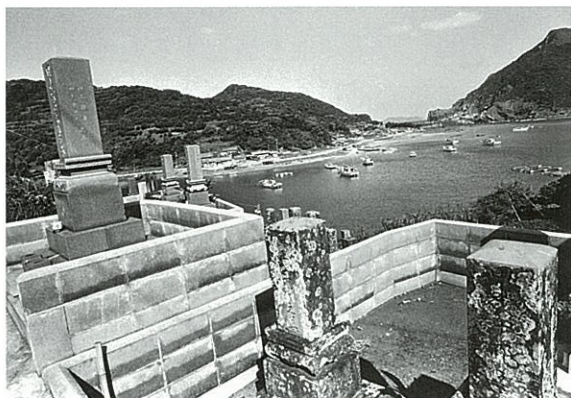
最近になって聞いた事ですが、カネミ油症事件に関しては、もみ消しのため、ある方面からの圧力がかかっていたとも聞きました。人の命をどう考えているのか、決して許すことはできません。

今、現在加害者として、言われているのはカネミ倉庫と国ですが、忘れていけないのが、カネカ（旧鐘淵化学工業）、PCBを作り、カネミ倉庫に出した会社です。現在全世界で猛毒のPCBの製造は禁止されています。しかし、起きてしまった被害は取り返しがつきません。残念ながら今の医学では人体に入ったPCBを取り除くことは不可能と言われています。被害から41年も経過して、被害者もかなり高齢化し、亡くなられた方もかなりいます。

全世界を見ても、例のない食品公害事件カネミ油症事件の早期解決を、被害者全員心から願っています。

そして、民主党に政権交代した今こそ、最大かつ最後のチャンスと考えます。

(玉之浦)



(撮影・河野裕昭)

消えない不安

80代・女性

カネミ油症事件が発生して40年。思い出すだけでも胸が痛みます。

自分の体調が悪くなるにつけ、我が身よりも子供の将来に不安を覚え、親としての大きな禍根を残す結果となりました。成長とともに、親の無知を恨んでいるだろうと悔やまれてなりません。

今こそ食油もメーカーや種類も多く販売されていますが、当時の僻地での生活は商店も少なく品も限られており、有害物質が含まれているとは知らぬまま家計をやり繰りする主婦としての心情は皆同じだったと思います。

食して数日後、不思議な症状が続き、医師の診断も不明な点が多く、迷い、苦しみ、悩みのあげく病院を点々とするばかり。その上、家族に対する責任の重さに日夜悶々とした日々を怯え、苦しみストレスとなって残り、現在でもその不安は消えません。

世間の目は異様なものを見るように冷たく、厭味や陰口を囁かれるやら。幼い子供や年頃の子供にとっては、一層辛かったろうと申し訳ない気持ちです。関係ない人に愚痴や泣き言も言えず、患者同士のひそひそ話で情報を得るばかり。耐える日々の苦しみは、一生忘れられないでしょう。

一時的な保障はあったにしても、一生安心の保障も確証もなく、苦悩と不安に怯えながらの毎日、研究機関も厳しい現状の中、それぞれ努力はなさっているのですが、遅々として進む様子もなく見捨てられ、忘れられていくのではないかと不安を覚えます。

油症患者というレッテルを貼られたまま終わるのではないかと思うと、たまりません。未認定患者の掘り起こしにしても、匿名を余儀なくせねばならぬ弱い立場の患者を救ってくださる神様がいてくださるでしょうか。

先の見えぬ患者の不安は募るばかりです。明るいい情報を期待したいものです。

(玉之浦)

捨てる神あれば、拾う神あり

矢口 哲雄

捨てる神あれば、拾う神あり。

カネミ油症被害者となり、しみじみと私どもにぴったりの格言だと思います。

顧みれば、カネミ倉庫の毒入り油を食べさせられ、顔、背中にニキビ様の吹き出物、女性には陰部に腫れもの、爪、歯茎は真っ黒、目やに、倦怠感、頭痛、痺れ等々、体に色んな症状が出てきた1970年（昭和45年）の春頃だったかと思う。

カネミ倉庫社長、加藤三之輔氏が来島し、あの長い顎鬚^{あごひげ}を撫でつつ、大きな体に小さな

声で、とても慰^{いんぎん}に提案された示談内容と言え、認定被害者に一時金で30万、あと病気のことは見れないとの条件。会としては、即辞退、さてと困っていたところに、小倉の弁護士2人と事務局員3人の方が来島された。

余談になりますが、その頃惜しくも自損事故で亡くなったタレントの赤城啓一郎のタイトルは忘れたが、「正義の味方赤銅鈴之助」というメロディが流れていた。

正に正義の味方が忽然と現れたのである。私達にとって、弁護士といえば今も昔も雲の上の人、油症問題の解決のため、訴訟をしてはとの提案、大いに皆賛成である。ところが、その相手に国も加えるとのこと。大正13年生まれの私は、1年間ではあるが、太平洋戦争時に軍隊生活をしたものである。当時は、国に一旦事あれば、身を鴻毛の軽きにして一身を捧げるというのが日本男児たる者の心意気であった。故に、何ともやり切れない気持ちである。

うやむやの裁判解決。その間多くの被害者の仲間たちが死んでいった。この人たちを思う時、可哀想で涙の出るのを止めることができない。

一審で敗訴のカネミは、判決を受け入れたことはご存知のとおり。治療代も誠意をもって支払っていたが、年月が経つにつれ対応が変わってきた。このことについては、五島中央病院と奈留病院も、決して被害者の味方であったとはいえない。また、行政も力を貸してはくれなかった。もっとも、被害者の会もいつの間にか解散状態となり、行政に何の要請もすることはなかった。それというのも、カネミ油症患者は、町財政を圧迫する厄介者でしかなかったという一面があったからに他ならない。

今にして思えば、私たちは帆柱も帆もない北前船に乘せられ、海原に放り出され、波間に漂う難破船のようなものであった。

2000年頃、東京に「カネミ油症被害者支援

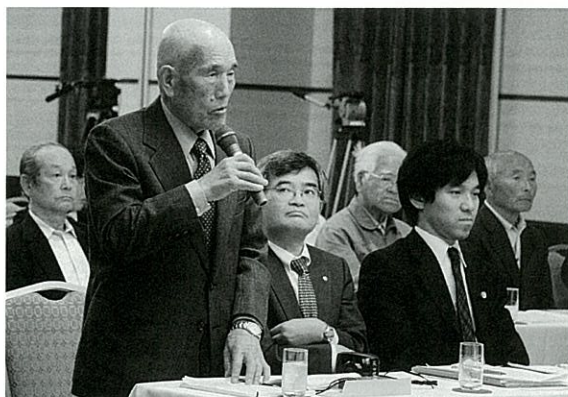
センター」が結成され、頼みもしないのに日本列島の西の果て五島までやって来た。その数、10人くらい。宣^{のたま}わく、国の仮払金を払わんでいいようにしてやる。健康管理手当も貰うようにせねばならん、等々そんな耳障りのよいことを並べ立てたように、記憶している。「そこで矢口さん、あんたの力で会を復活させろ」と。

2000年といえば、オレオレ詐欺の全盛期。「この人たちもその類だな」と思い、話も鼻の先でフンフンと聞いていた。それが、二回、三回と自費で説得に来るのを見て、「満更嘘でもないらしい、まあいっか、騙されてもいい、俺はこの人達の誠意について行こう」と覚悟を決めた。それが海原に漂っていた北前船に帆柱を立て、帆を張ってくれたことになる。

そして間もなく、その帆に向かって追い風を送ってくれたのが、地元出身の国会議員であり、1市5町が合併した五島市であり、県である。また、マスコミその他の応援には、お礼の言葉すら見い出せない。先だっの「カネミ油症事件を考えるワークショップ」では、劇の出来栄えとともに、中学生並びに教師の誠意に泣かされた一人である。ありがとう。

終わりに、この『カネミ油症40年記念誌』を企画し発行する五島市並びに協力者に対し、敬意を表するものであります。

(奈留・カネミ油症五島市の会会長)



カネミ油症救済策説明会で訴える

園児に食べさせなくて良かった

70代・女性

昭和41年9月、私が奈留へ転勤してきたのは、31歳の時でした。私は、やる気満々で赴任し、奈留での仕事が充実してきた頃、カネミライスオイルを摂取したのです。

まず、爪や歯茎に黒く変色するという変化が現れました。宿輪医院を受診すると、「あなたは油症ですよ」と言われ、五島中央病院を受診するようすすめられ、油症患者と認定されました。

私は何が起こったか理解できないまま、船に乗り奈留港に着くと、保健所の職員、医者、看護婦、警察官が私を迎えに来ていました。油症と認定された私に、いくつかのことを確認したかったようです。「子どもたちは食べていませんか」と聞かれましたが、

「食用油は園児用と職員用に分けており、子どもたちにはいつも購入していた食用油を使っています」

と答えました。

職員の食事は宿舎内の調理場、園児の食事は保育園内の調理場、ときちんと分けていましたし、食材もきちんと分けていました。保育園での調理には、当時「シラスメ」と呼んでいた菜種油を使用し、その空き缶が8〜9缶ほど残っていました。私は、保育園では確実にカネミライスオイルは使用していない、子どもたちには食べさせていないと断言できます。食事を園児用と職員用ときちんと分けていたことが本当に良かったと思います。

「園児にカネミライスオイルを食べさせていない」ことを保健所は認めてくれました。奈留町役場の担当者は、「園児にカネミライスオイルを食べさせてなくて本当に良かった」と安心したのです。

あの時、保健所の職員他多数の方が油症と

認定された私を港で待っていた異様な光景は、油症患者となって最初に一番嫌なことでした。今でも忘れることができません。

その後、私の顔は黒くなり、その中でも鼻とあごは真っ黒でした。保育園の職員は私を含めて5人認定となりましたので、福江で行われた裁判に2回ほど保育園の責任者として証言しました。裁判官に

「あなたの子どもがカネミライスオイルを食べていたらと考えてみてください」

と訴え、

「3月に卒業したばかりの若い職員も認定となりました。その職員に、奈留に来てすぐカネミライスオイルを食べさせてしまったことは、心から申し訳ないと思っています。今からの若い人の人生をこんなにしてしまったという罪悪感でいっぱいです」

と私の気持ちを伝え、

「私は女性です。結婚しない道を選んでも、綺麗でいたい気持ちは、他の女性と同じです」と自分自身のことも訴えました。

その頃、油症かな？と思うような皮膚症状の中学・高校生がいたので、自宅まで出向き「油症じゃない？」と聞くと、「油症となったら、嫌だ」「子どもの縁談にさわると怖い。認定とならないでいい」と、何名かの親から言われました。当時は、「油症」はやはり嫌われていました。

私は揚げ物が大好きで、たくさん食べていたので、他の患者さんより皮膚症状がとてもしどかったのですが、特に足・陰部には、大きなでき物が何度も何度も繰り返してできました。そのでき物ができると、立つこと、歩くこともできず、眠ることさえもできず、時には大好きな仕事も休まなければならないほどの痛みと苦しみでした。一番仕事をしたい時期だったので、悔しくて悔しくて、布団の中で何度も何度も泣きました。そのでき物が破れると、痛みはずいぶん楽になるのですが、多量に出てきた膿は、油の腐ったような臭い

と血液の腐ったような臭いが入り混じり、とてもひどい匂いでした。

この皮膚症状は、私にとって下半身機能の低下や歩行困難などにも関わるくらいのひどい症状であり、現在もまだ苦しんでいます。このでき物ができた場所が場所だけに、病院で診てもらうことができず、治療を受けることができませんでした。他の場所にできていたら、こんなに苦しまずに済んだのと思っています。

40年過ぎた今でも、陰部・耳の後ろ・鼻にニキビ状のできものができていて、いつになってもよくなることは悲しいことです。よくぞ結婚しなくてよかったと思います。

昭和49年頃、とてもひどい倦怠感が続き、子どもと一緒に踊ったり遊んだりできなくなり、仕事を変わりたいと思うようになりました。保母の仕事が大好きで保母になりたくなったのに、保育ができなくなった私は、あまり身体を動かさない職場を自ら希望し、長崎の本部へ異動となりました。自分が一番好きだった仕事ができなくなったことは、とても悲しいことでした。

昭和52、53年頃から、とてもひどい関節痛に悩まされ、足首の捻挫、腰のヘルニアがひどくなり、仕事が困難となり、思うように仕事ができなくなりました。病院を受診すると、医者に「なんか、骨が他人と違う」と言われるので、「油症です」と答えると、「他の人と違うね」と言われます。1週間に2回も捻挫をしたり、先月、手首の関節の腫れや痺れのために手術を行いました。麻酔はきかず、とてもつらい手術でした。

片方の手首の関節もばねがきかず、腱が伸びており神経にさわり、関節の曲げ伸ばしを邪魔しているので、手術が必要だと言われています。自分の身体だから一生背負っていかねばと思います。その頃から、歯茎が膨れ、指で押すと黒い血が出るようになり、3回も歯茎を切りました。同じ頃に差し歯の

本数が増え、昭和62年には全て差し歯になってしまいました。

3年前、一点の光がダイヤモンドの光のように見えるようになり、眼科を受診すると、「眼底破裂」と診断されましたが、随分前からの症状であり、油症の症状である目やにが原因だったのです。そのときちゃんと養生すればよかったと言われました。

カネミ倉庫は、内科的な治療、内臓関係の医療費は支払ってくれましたが、骨、関節、歯、目等の治療費は一切支払ってくれず、自費で支払っていました。骨の治療・あんまへの通院等にどれだけお金を使ったか……。何百万も使ったのです。

現在、私は医療費のことを心配せず、船とタクシーを利用し、本当にたくさんの病院、いろいろな科を受診できますが、これからもお金のことを心配せず、油症被害者が安心して病院を受診できればと願っています。

(久賀島・当時奈留)



導かれるままに

宿輪 敏子

「あの忌まわしい『カネミ油症事件』が世間から忘れられればいい」

私はずっとそう思っていました。私だけではなく、多くの被害者もそう思っていたので

す。そこにあるものは、差別と偏見だけだったのですから……。しかし、その願いは国によって打ち砕かれました。

平成9年のある日、父が、私たち夫婦の前に1通の封筒を差し出しました。

「実は、仮払金の返済は、国が求めて来たんだよ」

父は正座をし、表情をこわばらせながらとつとつと話し始めました。

「かりばらいきん？……」

私は、初めて耳にする言葉に何がなんだか全く分かりませんでした。

「私が国に借金を？……」

信じられないような話でした。

私の体が丈夫でないことは、主人は結婚前から気づいていました。具体的に結婚の話が出たときには、カネミ油症の被害者であることも勇気を振り絞って告白しました。しかし、国に借金までしていたとは……。

「主人に申し訳ない」と思うと同時に、

『カネミ油症事件』で、いったいどんな事件だったのだろう」

「どうしてこんなことになったのだろう」

と、初めて「カネミ油症事件」の全貌を知りたいと思うようになりました。

しかし、そのころ私の体は大変病んでいました。全身の重い倦怠感と婦人科からの不正出血、病院では痔の所見も見つからないのにお尻からも原因不明の出血が度々あっていました。事件の事を調べたいと思いながらも体調不良は進んで行き、いつの間にか3年が過ぎようとしていました。

そんなある日、ジャーナリストの明石昇二郎さん（『黒い赤ちゃん』の著者）が私を訪ねてきました。そして、

「カネミ油にPCBの何千倍とも何万倍とも言われる毒性を持つダイオキシン類が混入していたこと」

「現在でもカネミ油症被害者はたいへん病んでいること」

「仮払金問題では自殺者も出てしまったこと」などを教えてくれました。

その全てが初めて聞く事実で、私はとても驚きました。自分自身が被害者でありながら、なぜ、何も知らないのかということにも不気味なものを感じました。

その後、明石さんは、矢野トヨコさんを連れて再度やってきました。トヨコさんは、私にこう言いました。

「カネミ油症はダイオキシンの被害なのよ。この甚大な被害は、食べた私たちにしかわからないの。私たちが医者教育すべきなのよ。医者は何にも知らないんだから」

私はその大胆な発言に面食らいましたが、トヨコさんの発言には一点の曇りもなく、理路整然としており、説得力がありました。大手術を何度も重ねてきたトヨコさんは、

「『私が死んだら全身をくまなく解剖して油症の解明に役立てなさい』と、医者に言っているのよ」

とおっしゃいました。そして、

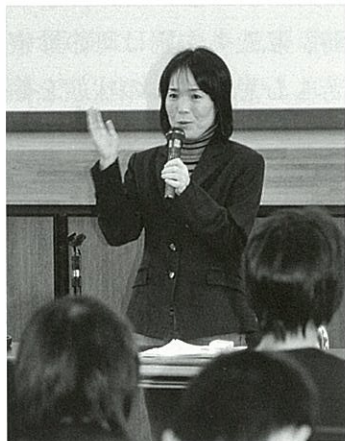
「私はいつまで生きられるか分からないから若い世代の跡継ぎを探しているの。あなたのような……」

と言われました。私は、「とんでもない」と首を横に振りしました。

何しろ私は被害者でありながらカネミ油症のことを何も知りませんでしたし、体調も最悪だったのです。現にトヨコさんの話を聞いている最中にも1時間を経過したときから背中が痛み始め、2時間が過ぎる頃には座ってもいられないほどの背中痛みと胸苦しさとでそこに倒れたいのを必死で我慢していました。あまりの苦しさに「早く帰って」と思っていたのです。

その後、カネミ油症被害者支援センター（YSC）の方々が何度も訪ねてきてくれるようになり、ダイオキシンが人の体にどのようなことをもたらすのかを教えてくださいたり、仮払金問題で苦しんでいる被害者たちの

現状を伝えてくださったりしました。特に、石澤さんは被害者の聞き取りを熱心に行い、被害者に今何が起きているのかを具体的に教えてくださいました。



中学校で講演

そんな支援者たちの熱意のおかげで、私もやっと独自にカネミ油症事件やダイオキシン類について調べるようになりました。また、身近にいる被害者たちが大変な病魔に侵されている現実を目の当たりにするようになり、自分が生まれつきなのかと思っていた奇妙な症状や病も、毒入りカネミ油による可能性が高いのではないかと思うようになりました。

その後、被害者への聞き取りをするようになり、その推理が正しいことを確信しました。また、聞き取りを重ねるごとに想像もしなかったほどカネミ油症の病が深刻であることを知り、恐怖さえ感じました。

国や加害企業による数々の人権侵害はここに書き尽くせませんが、仮払金返還請求問題は、国による甚大な人権侵害の一つでした。

黒い赤ちゃんで生まれ、高校生で白血病に倒れ亡くなった息子、後を追うように癌で亡くなった夫。この家の奥さんにも、国は、亡くなった二人の分も含めて仮払金を返せという書類を送りつけたのです。最愛のわが子を亡くし、働き手である夫にまで先立たれ、油症の症状で働くこともできない中、やっとの思いで生きていた奥さんは、か細い声を絞り出すようにこう言いました。

「国は、私らに死ねと言っているのでしょうね……」

私は、このことばを一生忘れることはできません。

「こんなことが許されてたまるもんか。これは正義ではない！」

私は、強くそう思いました。

こうした中、YSCの石澤さんの言葉が胸に突き刺さるようになりました。

「若い世代の誰かが顔を出して訴える必要があるの。顔を隠しては、支援の輪は広がらないのよ」

次第に「私がやるしかない」と思うようになりました。神様が私の前にレールを引いているようにも感じ、私は支援者や目に見えない何かに導かれるまま、今日まで突き進んで来ました。

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。叩けよ、さらば開かれん」

この聖書のことばが私は好きです。仮払金問題のときも被害者や支援者が解決を求めて立ち上がり、尊敬する保田弁護士や心あるジャーナリストたちが加わって解決策を探し、五島市も一緒になって国の厚い扉を叩いてくれました。そして、初めてその厚い扉は開かれたのです。

今、私たちは全被害者救済を求めて再び厚い扉を開かんとしています。

「正しいことであれば、あきらめない限り必ず達成される」

私は、そう信じています。

戦いは苦しいですが、それ以上の喜びを私はいただきました。私たちカネミ油症被害者のために身を粉にして支援していただいている崇高な方々との出会いです。この気高く温かい人々と出会えたことが何よりの喜びです。神に感謝……。

(福江・当時奈留、

カネミ油症五島市の会事務局長)

苦しむ患者たちの声

70代・女性

自分の人生は何であったのだろうと、ふと考えるときがある。70数年生きてきて、6〜7割は苦しく辛い事ばかりだった。子供の頃は戦争のため空襲空襲で学校にもろくに行けず、落ち着いて勉強もできなかった。

敗戦で終戦となり、恐ろしい目に遭いながら、昭和21年、小三の時、着の身着のままの裸一貫で満州より、母方の里、五島の玉之浦に引き揚げ者として帰国した。内地もやはり食糧難で、それは惨めなものであった。当分は苦しい生活が続いたが、母親が中学校の教師として勤め、私たち姉妹は高等教育を受けることができたおかげで、人並みの家庭が持てるようになった。

その矢先、不幸にして汚染されたカネミライスオイルに出合った。ダイオキシン(PCDF)混入の毒入り油である。何と不幸の連続であろう、どのような経由でこの辺びな五島に入荷されたのか。今さら誰をも恨みようがない。

私の家族も原因不明の病魔に侵され、めっちゃめっちゃな生活へと一変した。同一家族で同じ物を食べていながら進学就職と上京している長男は色々と症状は出るものの、勤務上検診が思うように受けられず、いまだに未認定である。

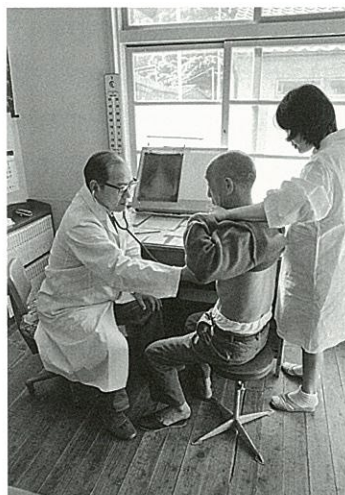
一番困ったのは、女の子の場合。年頃を迎え結婚話が出た時、油症被害者である事は言えなかった。それぞれ結婚したが、やはり病弱のため、色々と欠陥が出た。そして、最悪の離婚にもつながり、孫たちが犠牲となった。その孫たちにも油症と思えるような症状が出ていて、不安で心配である。来るべき時が来て、親としてこれほど辛いことがなく、胸が痛み苦しい日々である。

毒入りとは知らず、食べさせてしまった事に罪悪感を持ち、家族に申し訳なく、すまない気持ちで、いつも頭からカネミ油のことが外れない。

*

油症発生当時、私たち夫婦は町の診療所に勤めていて、苦しむ患者さんの状態を始めから死に至るまで、いや現在までをよく知っている。

昭和43年の2〜3月頃より急増した苦しむ患者さんを見てきた。病室は満杯で、待合室も病室に変わり、野戦病院化した。患者は、苦しみの余り大声で医者^{のし}を罵り、当たり散らした。とても怖かった!!



(撮影・河野裕昭)

油症独特の化膿したニキビ状の黒ずんだ顔に始まり、黒い赤ちゃんの誕生、成人病患者の多くは最終的に癌に侵され、もがき苦しみの中、死に至った。気の毒な最期の姿、地獄を見たような気がした。あの呻き声は、いまだに耳にすがり忘れられない。

病気のため、仕事が思うようにできなく、生活に行き詰った人、夢見た婚期を失った人などの自殺者も数人出た。その中の一人の自宅にお悔やみに行き、顔を見た。苦しかったのでしょう、口をへ^のの字に結び、この世に未練がありそうに、残念そうな姿を見た時、気の毒で悲しく侘しく思え、涙をこらえつつ静

かに合掌した。人間の命は儚いものである!!
淋しい。

カネミ油症事件以前に起きたダーク油事件で二百万羽のニワトリの犠牲も出た。カネミオイル事件はれっきとした食品公害です。ニワトリ同様に、私たち被害者を見捨てたものも同然で、国は現在までこれといった救済もなく、放置してきたのです。また、数十年もの間、多額の国費を費やし研究してくださっているのですが、いまだに何ら治療法も見つかっていません。

油症患者のダイオキシン(PCDF)体内含有量は、正常者に比べて数十倍の値です。この値は何十年経っても下がりません。40数年もこの事件を引きずり長引かせたのは、私たち被害者が田舎者で、我慢し諦めて訴えることを知らなかったからです。二度とこのようなミスで食品公害を繰り返さないよう、声を大にして私は言いたいのです。

申し遅れましたが、この場をお借りいたしまして、多くの支援者の方々に、心よりお礼を申し上げます。皆さまの大きなお力添えによりまして、油症の会が再起し、五島市の会が結成されましたこと、本当にありがとうございました。深く感謝いたしております。

今後とも、どうぞご支援のほどよろしくお願いいたします。(玉之浦)

運動に関わり続けて

池崎 明

カネミ油症事件発生より、早や40年、問題の深刻さに戸惑いながら、被害はとんでもない拡がりをみせていた。

当時産まれた赤ちゃんも今や40歳、社会にあってはそれなりの立場にあり、家族にあっ

ては、良き父母となられているであろう。

私たちは、問題発生と同時に被害者の会を組織し、同時に弁護団、支援者の会によって全国協議会を発足させ、諸問題に取り組み、行動を起こした。

カネミ倉庫へ、鐘淵化学(PCB製造企業)等との交渉、同時に国への働きかけ等々、東京行動では、有楽町での街頭立ち、渋谷駅前でのビラ配布時には国家権力の介入を招くこともあった。

さらに、国(環境省、厚生省、農林省)に対し、問題解決への道を求めて参ったものだが、それらの流れの中で、今でも心に残るのは、厚生省の姿勢であった。

三度伺い、三度とも話し合いどころか、正面のシャッターさえ開こうとしなかった。まさに門前払い、一切聞く耳を持たないといったこの頑なな姿勢こそが問題の究明等の遅れを引き摺った一つの要因につながったであろうことは、言えなくもない。

故に、その都度路上座り込みを続けることになる。「食中毒だ」の一言で片づけようとさえしたのである。

当時、裁判が終わるまで、という人もいたが、裁判は一つの区切りであり、すべての問題の解決ではない、被害という現実と今後も苦しみ続けなければならない被害者がそこにいる、という厳然たる事実だ。

我々が当初から一貫して訴え続けたのは、「元の体に戻してくれ」だった。それは取りも直さず、治療法の研究及び解明と、救済の一日も早い確立を願ったのである。

今日、色んな食品の社会問題が提起されている時、食品公害の原点とも言われるべきこの油症の問題の解決が、今や最も急がれるべきであろう。

思えば、当時この問題の解決が遅れるほど、その間国民は「総予定被害者」となると言い切った時、農林省の方々が目を丸くして驚いていたことを思い出す。

長い年月の中で、苦しみと闘いながら、それでも一生懸命生きようと努力を続ける人々、中には過酷な体験との向き合いに沈黙を選ばなければならなかった人たちもいる。

いわれのない差別や偏見に苦しみ悶えながら、過去そして現在、そして未来までも引き摺って生きねばならない二世、三世の問題もある。

遅々として進展をみせない解明に、時にはふと虚しさを覚えることもあったが、顧みる時、この様な苦闘中であって、絶え間ない協力を惜しみなく支えてくださった多くの支援者の方々の、温かい心遣いに感謝の念尽きることなし。

こうした長い時間の経過する中、本業である職場への気遣い、人間間の葛藤等々、住民運動の難しさも十分に味わいながら、ついには我が身の病に抗するべくもなく、一線より身を引かざるを得なくなり、更にはこよなき理解者であり、陰ながら支えてくれた糟糠そうこうの妻の病の介護に明け暮れる日々となる（油症重症認定者）。8年に渡る闘病の壮絶さは当人にしか計り知れないものであり、そしてついに逝く。

ふと周囲を見回せば、かつて行動を共にした先輩や仲間達の多くが無念の思いを噛み締めながら逝ってしまっているのに気付く寂しさひとしおも一人のものがある。

幸いにして、今日若い人達が立ち上がり、再びこの問題に取り組んでおられることに喜びと心強さを覚えてやまない。

忘れてならない未認定者の救済、検診のあり方等々課題も多い中、地道に研究を続けてこられた学者の方々もいらっしゃるのだ。

互いに知恵を出し合い、一日も早い解決の日は訪れんことを祈るものである。

（玉之浦）

実名を明かすに至るまで

下田 順子

カネミ油症事件は、発覚から40年の節目を平成20年10月10日に迎えた。「もう、40年経つ」と言えば、あっという間に過ぎたように聞こえるが、私たちカネミ油症被害者には、「もう」とも「まだ」とも言えないような40年間の月日でした。昭和43年の春に小学校に入学した私にとって、時代だけが40年過ぎたことを感じる。

苦しみの中で懸命に生き、身体に次々に現れた症状に戸惑い、いじめに遭い精神的にも追い詰められ、子供だった私は何が起きているのかさえ分からなかった。ただ、カネミ倉庫のPCBを循環させていた蛇管が、テレビで放映されるたびに、恐怖に駆られたことだけは憶えています。

どうして人が口にする食品と数ミリしか隔てていないところに化学物質が、それも有害で毒性の強い物が使われたのか。カネミ油症が社会に与えたものは本当に大きかったと思います。しかし、社会は豊かな経済ばかりを追い求め、カネミ油症の事など世間の片隅に追いやったように思えました。

小学校の頃から頻繁に出て止まらない鼻血、そして頭痛や腹痛や全身の痛みと腫れ、痺れ感、身体からエネルギーを吸い取られてしまうほどの倦怠感。ニキビ状の湿疹。小さきまざまおできができ、中から血膿の汁が出て悪臭が鼻をついた。爪が茶色に変色して剥がれたり、どうしてなのか分からないまま過ごした日々。

カネミ油症事件を知るまでの苦しみ、原因を知った時のショックと驚き、治療法はないと聞かされた時の不安。油症と認定された時の将来への不安。増え続ける病気や症状の苦しみに耐えきれず、命を絶とうとしたことさ

えありました。

しかし、この苦しみや被害の実態を社会に伝えなければと生きる決心をしました。今も油症による病と闘っています。

昭和62年に長年闘った裁判は到底納得のいかない形での終わりをみました。

私は本土で結婚し、夫と二人の子供とともに生活している。夫は油症の被害者ではない。子供たちへの影響をいつも気にしながら過ごしてきた。

カネミが猛毒ダイオキシン類の被害だったと知ったのは数年前です。

「だから医者がおかしいと言ったんだ」

私はひとり納得した。体全身が病気、どこをとっても丈夫と言えれるところはない。カネミ油症の被害者たちへの支援も広がり、私も色々な場所で被害の証言をしています。

私は県央の諫早市に住んで20年以上が経ちました。カネミの事で相談できる人はいませんでした。五島を離れた患者たち、県本土で被害に遭った人たちそれぞれ本当に孤立の中にいました。本土で暮らす被害者が、涙を流しながら自分の症状を話してくれた。

「誰にも話せなかった。医者に症状を話すとそんな病気はないと言われ、複数の病院を回った」

と聞いた。他の被害者も同じ症状と闘っている現状を目の当たりにした。

そして、未認定の問題は絶対に避けてはいけない大きな問題です。カネミ製の汚染油を食べて症状が出ているのに認定基準の厳しさから未だに認定されていない人が多数いる。同じ家族で認定、未認定に分かれるという現実がある。この未認定の人たちの声は悲痛の叫びであった。

偏見と差別を恐れて検診すら受けていない被害者が多い。沈黙することで、どうにか生きてきた人ばかりだった。そっとしているしかできないのか。本当に悩みました。

差別と偏見を少しでも取りたい。これは被

害者にとっても、社会にとっても良くない。

最近の食の問題を考えると、油症で苦しんできた私たちでしか語れない事があるんじゃないか。真実を語り、偏見と差別をなくせたらどんなに良いか。

今まで名前を伏せていた私は、平成21年夏から実名を明かして動いています。諫早の大学で学生に油症の話をしています。

油症を風化させないためにも、次世代へ語り継ぐべきだと思う。化学物質による食中毒事件を起こさないためにも、私たち被害者の意義は大きいと思います。

最後に、たくさんの支援者、五島市の市民の皆さまの温かい援助に心から感謝いたします。大きな救済へ、カネミ油症の全被害者に、希望の道があることを願いつつ、ペンを置きたいと思います。一人の油症被害者より。

(諫早市・当時奈留)



2009年7月12日、長崎市の鉄橋にて

カネミ患者の独り言

70代・男性

あー、膝が痛いなー。腕もすぶく（疼痛）。この頃肩も痛くなった。持ってなかった色々な付属品がくっついてきた。不用品だが一。

必要なものは、どんどんなくなってゆく。

やる気も元気も、いつの間にかなくなった。

今日一日を何とか無事で過ごせたら言うことなし。そんな気持ちになっている自分をみて、年かなー、なんて諦めている自分に腹が立つ。

「記憶も薄れてきてるかな」と思う時も最近たまにある。みんなの意見と合わないことや、自分の記憶と違っていることがあり、納得できない問題に悩んだり怒ったり、これは精神的に体に悪いと気づき、我慢、我慢と自分自身を慰めている。

いい年寄りになろうとは思っているのだが、これも思いと現実とはまだ、結構かけ離れている。

カネミのことを何か書いてみないかという話が来た時も、何も言うこともなし、書くなんて考えてもみなかった。カネミのことも昔のこととゴミ箱の中にでも押し込めてしまおうかとも最近では思っていたところだったが、まあ年寄りの独り言でも言ってみるか、薄くなった記憶をたどりながら呟っている。

40年前、か、若かったもんかなー。何だこんなもの。目やにが出たり、少しずつ体に変調を感じるようになる。

歯を食いしばる思いで仕事に打ち込んだ。生活を少しでも豊かに、子供をより良い学校に進学させたい、この思いが、蝕^{むしば}んでいく体に鞭打って頑張ってきた両親や妻や子供にまで、相当の労力と苦勞を強いてきたものと思う。

おかげで新船も造れたし、安い家でも新築できた。子供も自立できたし、これからは自分の人生を夫婦の楽しみを、ゆっくりと探しながら余生を送ろう。こんなことを考えていた矢先に、とんでもないものが待っていた。

漁師の仕事をやめ、漁船も処分し、身軽になった途端、心筋梗塞。何でだ、何で俺なんだあ、思ってみるが、どうしようもない。これで病院とも親戚になった。平成14年の夏でした。

それから3年、今度は膝が痛み出す。病院に行くと、整形の先生、これはもうだめだと言う。何とかしないと、日常生活にも不自由をきたすことになるから、手術しかないだろう。それでも頑張ってきたが、我慢にも限度がある、もうやってみよう、腹を決めたのが平成20年の暮れ近くになってからでした。

手術前の検査で、今度は腹部大動脈瘤、爆発寸前だという、膝では命は取られないが、こいつは破れると命の保障はできない。

どうする？と先生に言われた。まだ死にたくはないので、やってください、大手術になるが、これも俺の人生の一環かよ、あきらめる。縁があったらもう少しこの世をみてみたい。いや、頑張って精一杯生きてみよう。生きよう、死ぬもんか、そんな気持ちで手術に臨みました。

執刀してくれた先生ほか医療スタッフの懸命な努力と、適切な療養指導により、命を取り戻すことができました。このもらった様な命、大切にしくちや。世話になった人、心配をかけた人、病院の医療スタッフ、考えてみたこともなかった人達、いっぱい迷惑をかけたし、すまないもんなあ。ありがとう、本当にありがとう。

手術が済んで目が覚めた時、執刀をしてくれた先生が、にこっと笑って成功だよって言われた瞬間、生きてる。みんなみんなありがとう。本当に生きてるって、こんなにも素晴らしいものと感動しました。

以来今日まで、この世に悔いを残さないように、自分流に生きてみよう。できるなら、近隣にも迷惑をかけない様には思っているのだが、年寄り2人、どんな事が待っているか見当もつかないが、今はひっそりと病院に通いながら暮らしている。

俺の人生こんなもんだったのか、幸せだったのかなー、精一杯生きたつもりだったがなー、まあ上を見ると限りがない、下を見ないと語れない。考えようによっては、悔いの

ない人生だったかなー。まあ、良しとしよう。
と、自分流に納得している。昭和もみだし、
平成にも生きてみだし、言うことなし。



(撮影・河野裕昭)

いや、ある。どうしても納得できないもの
が……。

カネミ油症、これは患者自身には何の責任
も落ち度もない、人間の命を保つために欠か
せない食品に PCB が混入し、これが何と堂々
と店先に出て売られていた。

原料は米ぬか油、健康増進、美容にも効果
がある。宣伝文句は誰でも飛びつきたくなる
ようなことを並べていた。騙された。こっち
も運が悪かった。不可抗力なんて適切か
なー。こんな言葉。

でも、どこかに責任があるはず。その所在
を正すために、司法の判断を裁判所に任せ
た。

結果は出た。これが我が国の法律かと思わ
せる様な判決だった。同じ事件で同じ弁護団
で行った油症裁判が裁判官によって異なっ
ている。満額の認定額を得たグループ、3分
の1程度の執行しかできなかったグループ、途
中で裁判が取下げになったグループ、三者三
様の結果しか待っていなかった。

これで幕を引いた原告も悪かったが、弁護
団には何の策もなかったのか？ この責任は
軽くはないような気もする。せめて、何か一
つでも被害者全員が共通の補償が得られな
いか、これは私一人の念願でしょうか。これが
私の人生最大の悔いになった。

もう考えるのよそうかなー。いい年とりた
いなー。この膝の痛さとも別れられないか
なー。年寄りの独り言。(奈留)

親、子、孫三代で話し合いたい

永尾喜美子

日本の西の果て、東シナ海に面した大瀬崎
灯台のふもと、自然に恵まれた半農半漁の町
の玉之浦。当時、1,428世帯、5,258人、現在、
937世帯、1,765人、過疎の町です。

当時、我が家にはまだテレビもなく、米や
麦、野菜作りに自給自足の生活、主人は玉之
浦漁協に勤め、貧しいながらも幸せでした。

栄養満点の油だと買った油が、毒入りカネ
ミ油だったのです。そうとは知らず、野菜の
油炒め、子供のおやつにドーナツや、加勢し
合って田植え、夜は親せき、隣近所、家族ぐ
るみで賑やかな楽しい夕食、魚フライや特に
ドーナツは子供にも大人にも人気で、いつし
か我が家の自慢料理。一口のものでも分け合
う田舎の習慣が仇となって、被害を更に拡大
させたと思います。

母親の私が油を買って食べさせたばかり
に、家族全員に体の異変が起きたのです。頭
痛、手足のしびれ、体のだるさ、めまい、吹
出物、歯茎や爪の変色、目やにが出たり、鼻
血が出たり、家族の症状が一段と悪化するば
かり。当時は夫婦と子供4人の6人家族で、
近くに住む主人の両親にも食事を届けていま
した。

昭和43年の秋深い頃に、玉之浦で多くの被
害者がいることがわかり、残りの油を慌てて
処分しました。暮れになって多くの方がカネ
ミ油症と診断されました。その後、被害者は
示談派と訴訟派に分かれ、偏見の目で見られ

たり、患者は働くことができなくなり、婚約解消、黒い赤ちゃんも産まれた。世間は騒ぐ一方で、子供の将来を気遣い、誰もが油症について語ろうとはしなかったのです。

我が家でも早くから検診を受けていましたが、なかなか認定されませんでした。最初に認定されたのは主人の父（永尾金蔵）で、昭和46年3月25日に亡くなった直後に認定され、遺族が一陣の裁判に加わりました。主人の母もその直後に亡くなりましたが、認定されないままでした。その後、当時4歳と2歳だった次男と三男が昭和51年7月26日に認定され、二陣の裁判に加わりました。中学生になっていた長男と長女は検診に行きたがらなくなっていました。私は原告団の運動に積極的に参加し、東京に行って労働組合を回ったこともありました。

昭和61年5月15日、第二陣訴訟の判決で国とカネカの責任を一転否定、私たちは突然被害を受けて苦しんでいるのに、悪い事をした訳でもないのに、裁判で負けたのです。なぜ？ どうして？ 第二陣の判決は、私たちに死ねという残酷な判決でした。

私は昭和61年2月27日に認定されましたが、もう新たな提訴はなく、和解の話が始まっていました。結局、下の二人の子供とともに昭和62年の最高裁の和解に加わりました。

その後、大きく変わり、国がこれまで支払った仮払金返済請求、一定の人はカネカと和解、残された課題がありながらもカネミ油症事件は終わったと自分に言い聞かせ、諦めるよりほかなかったのです。

でも、見捨てられてはいなかった。油症診断基準を改定、PCBだけでなくPCDF（ダイオキシン類）を取り入れてから、平成16年12月8日、主人（永尾丈一）に油症認定の通知。「良かった、捨てられていなかった」。感謝しながらも、複雑でした。

主人は、みぞおち周辺が重苦しく、痛み、吐き気、げっぷ、下痢、おう吐をともない検

査入院。黄疸で苦しんでいても、原因が判りにくかった。平成9年3月17日、手術。丸1年後に同じ箇所が再発、胆道がんの大手術。転移は免れたが、リンパを全部取り除いた。喜びもつかの間、季節を問わずカゼに悩まされ、定期検査、白内障で両目とも手術。元の体に戻りたいと無我夢中で借金しその場しのぎの日々でした。

私たちにとって、発生から41年間は何だったのだろうか？ 何も変わっていない、謎の多い事件としかいいようがない。

41年目にして始まったのです。新認定患者は、平成17年3月16日、カネミ倉庫に交渉。平成19年12月5日に2回目の交渉。社長は会ってもくれません。交渉のテーブルに着こうともしない。明日の命もわからない新認定原告48名は訴訟に踏み切りました。1日も早く、主人が活着しているうちに救済すべきです。

私は借金で耐えてきました。カネミ倉庫は借金してでも新認定患者に損害賠償を果たす義務があるはずです。良心的対応を期待しています。

昨年2月、当時8歳だった長男が油症と認定されたい。それも母親の私に隠そうとするのです。どうしてかな？ 当時6歳の長女は未認定です。「母親は今まで何をしているのか？」と問われる母親の責任は重大で、謝っても許されるものでもない。どうしたらよいかもわからない。辛い。私が気付くことなく去って行った我が子、もう一度でいいから逢って話したい。親としてわからない。私は母親失格です。私には死ぬ事も許されない。「辛か、気が狂いそう」。重苦しく眠れない夜は睡眠薬に頼っていました。

過去どうして41年経っても解決できないのか？ 何でこうさせているのか？ 現在、今、私たちは何をすべきか？ 今、頑張らなければ未来はない。親、子、孫三代で話し合いたいと思います。

薬害、食品公害で苦しむのは、私たちが終わりにしたい。日本の未来のためにも、皆さまで一緒にこのような事が二度とないよう取り組みさせていただきたいと思っています。

(玉之浦)



2008年5月、新たに提訴

やむなく提訴に至る

古木 武次

私は、昭和5年5月1日、旧長崎県南松浦郡奈留島村、現在五島市奈留町の北の海岸沿いの阿古木という辺りな小さい集落に産まれました。

昭和28年に結婚し、半農半漁で生計をたて、子供4人と妻のお腹の中には胎児もいました。贅沢な生活はできなかったが、健康で幸福な生活で暮らしていました。

問題のカネミ油を買ったのは、昭和43年3月頃だったと思います。安くて良い油があることを知人から聞いて、小店の矢口商店から一斗缶で購入、自宅まで配達してもらい、当時は魚が豊富でしたので、魚の天ぷらに芋の天ぷら、野菜とうどんの炒め物など、この油をよく使って家族全員で食べていました。

しかし、昭和43年8月頃、奈留の街で米穀などの販売業を営んでいた叔父山下勇吉から、この油は悪い油らしいから食べてはいけなと注意を受け、びっくりして残った油を缶ごと一緒に屋外に捨ててしまいました。残った油は4升くらいで、家族で6升ものカネミ油を食べていたことになります。

その原因で、私たちは全身的な障害を受け、油症事件発生以来41年間様々な疾患で痛み苦しみ、肉体的にも精神的にも経済的にも悩み苦しんできました。

油を食べた当時は、役所などから何ら情報もなく、また、阿古木の集落でカネミ油を食べた家族が他にいなかったこともあり、油症の知識はまったくありませんでした。

すでに奈留町では、昭和44年から油症検診が始まっていた。私たち夫婦がそれを知ったのは、油症事件発生から13年経過した昭和57年でした。最初の検診を受け、以来平成14年度まで10数回受診しましたが、認定とはならず、およそ20年間は中断されて、半ば諦める思いでいました。

その状況の中に、平成13年に当時の坂口厚生労働大臣が、国会答弁で油症被害の原因物質はダイオキシン類によるものと正式に認めた結果、そのきっかけで平成14年度からダイオキシン類の血中濃度が診断基準に追加されて、私は平成16年度、妻は17年度、三男は18年度に、油症発生から私は36年ぶり、妻は37年ぶり、三男は38年ぶりに認定されましたが、残る子供4名は未認定のままです。

それにしても、平成16年度から平成20年度までに、認定は全国でわずか46人に終わっています。現行の認定基準では、どんな重症の被害者も、主にダイオキシン類の血中濃度が低い者は認定から分断されている。特に認定家族の中で、毎日の生活で一緒に猛毒のダイオキシンの入った食物を直接経口摂取していることがはっきり分かっているながら、不認定には到底納得できません。国は、抜本的に認

定基準の見直しをして、苦しんでいる多くの未認定被害者を救済すべきです。

次に、カネミ油症新認定者の損害賠償請求訴訟に至った経緯については、カネミ倉庫株式会社は、私たち被害者の全身的な疾患で痛み苦しみ、肉体的にも精神的にも経済的にも悩み苦しめていながら、わずかな見舞金23万円と油症認定後の医療費個人負担分と通院に伴う交通費などの支払いのみで慰謝料は支払わず、カネミ倉庫は被害者の痛みや苦悩はまったく理解していません。

特に、新認定被害者は、油症発生から認定されるまでの30数年の長い間医療費や交通費など多額の費用を負担していることから、それだけの補償では到底納得できず、カネミ倉庫に対して、平成17年3月と平成19年12月と2回直接会社へ赴き面談交渉を行いました。社長は不在で謝罪もなく、会社側の弁護士は、会社の財力を理由に要求を拒否し、まったく誠意がみられないといったあり様でした。

一方、平成18年4月、日本弁護士連合会も原因企業であるカネミ倉庫株式会社に対し、相当額の賠償措置を講ずるように勧告していただき、さらに、平成19年度には、自民党と公明党による与党プロジェクトチームがカネミ倉庫に対し厳しい責任追及と救済勧告もしていただいています。それでもまったく誠意を示さず、道義的社会的責任の面からみても、到底ゆるされないことです。こうしたカネミ倉庫の不誠実な態度から今回やむなく提訴に至っています。

猛毒のダイオキシン類の混入した食物を直接経口摂取して発生した食品公害事件は、世界に類のない事件といわれ、二度とこのような事件が発生しないために、後世に伝えていきたい。（奈留、新認定裁判原告団団長）

どうしてこんなに寂しい思いを

70代・女性

カネミ油症被害が騒がれ始めた昭和43年頃から、私の体にもカネミ油症の影響が徐々に現れ始めました。

私が体の異変に最初に気付いたのは、陰部にでき物ができ、ものすごく腫れたのです。そのでき物は、化膿するまで、今思い出してもぞっとするくらいとても痛く、膿が出るまでは仰向けにも横にも伏せにも寝ることができず、ただ足を開いて立ったままの状態、痛みが少しでも治まるのを待っていたことを憶えています。

しかし、そのでき物は、治療してもすぐに3か月から半年に1回のペースで化膿するために、近くの病院ではだめだと思い、福江の病院まで入院と通院を繰り返すことになり、タクシーを利用しました。本当はバスを利用したかったのですが、バスは1日に数便しかなく、座席に普通に座ると飛び跳ねるくらい痛かったために、バスを利用することができず、やむなくタクシーを利用していました。この往復のタクシー料金は、私にとってはたいへんな負担であったため、痛くても病院代を節約しようと、特に痛みが激しくなった時だけ福江の病院へ行くことにしていました。

主人に症状のことを話し、夫婦の仲が険悪になったこともありました。40年前、私もまだ若く、場所が場所なだけに、誰にも相談することができず、周囲にわかるとどんな目で、見られるか不安でたまりませんでした。

入院中は、化膿した部分をメスで切り、膿を出すことをひたすら繰り返していました。しかし、化膿した部分を治療しても、1週間から10日間ほどで、すぐに再発していたために、常に、何時あの痛みが戻ってくるのかという不安にいつもかられていました。

今でもこの症状が治ることはなく、平成18年10月の入院、平成19年7月にも入院しました。

また、私は、子宮筋腫になって子宮の摘出手術を行いました。手術前は、生理痛がひどくて、特に腰や下腹部の痛みは、耐えきれないほど辛いものでした。私にとってこの痛みは、肉体的にきつかったことは当然ですが、それよりも子どもを持つことができなくなってしまったことが、今思い出しても気が狂うくらい、とても辛いものでした。

昭和43年頃から蓄膿症もかなり症状がひどくなり、昭和50年と平成16年の9月に手術を行いました。蓄膿症はかなり症状が悪かったために、福江の病院まで1週間に1回くらい、1時間かけて通院をしていたこともありました。

目についても、子どもの頃から何の問題もなく視力も良かったのですが、カネミライスオイルを摂取した頃から、ものを見てみると目がすぐに疲れるようになり、平成16年2月に緑内障、4月に白内障の手術を行いました。今でも、光を見ると、目が疲れてしまうために、色つきのサングラスをつけています。

最近では、全身が骨粗鬆症と診断されるとともに、右手の人差し指の第2関節が特に痛くて拳を握ることができなくなりました。

また、左肩が痛くて左腕が上がらなくなっていますが、医者診察を受けても、原因が何なのかははっきりわかりません。

このように、私の体のあちこちに色んな症状が出ていたので、カネミ油症ではないかと思い、毎年、検診に行ける時には必ず行っていたのですが、平成16年12月にカネミ油症の認定基準が変わるまでは、油症の認定を受けることはありませんでした。そのため、長年に渡って私は油症認定を受けることもなく、何の援助も受けることができないような状態でした。

発症してから、私は治療のために、1時間以上時間をかけて福江まで出かけ、入院、通院を繰り返し、病院を利用する回数も多かったため、私たち夫婦にとって毎回かかる治療費と交通費は、とても重い負担でした。

カネミ倉庫は、ただカネミ油症認定を受け前だからという理由だけで、治療費等の支払いには一切応じる意向を示すことはありませんでした。

カネミ油症の治療券についても、長崎県内のすべての病院で使用できる訳ではないため、使い勝手がよくありません。

私は、カネミライスオイルを摂取したことで、今まで体に色々な症状が現れ、苦しめられてきました。体の痛みはもちろんですが、一番辛く、悔しいことは、子宮筋腫の手術を受けたために、子どもをつくることができなかったことです。

私の姉妹には、みんな子どもがおり、甥や姪を見るたびに、どうして私たち夫婦だけ子どもがいないのか、どうして何も悪いことをしていないのに、こんなに寂しい思いをしなければならないのか、このことを思うと悔しくて、悔しくてたまりません。

私は、今、カネミ倉庫と裁判を行っています。一体、誰が販売したカネミライスオイルのせいで私がこんな体になり、様々な苦痛を味わわなければならなくなってしまったのか、少しは真面目に考えたことがあるのでしょうか。今回の裁判で、カネミ倉庫は、また法的な責任を争ってきていると聞きました。私にはまったく理解できません。私は、法律のことはわかりませんが、常識的に考えた場合、自分たちの行ったことを一度でも考えたことがあるのなら、こんなことはできないはずです。

私たち夫婦には子どもがいません。この裁判が長引いた場合、私たちの意志を継いでくれる者がいないため、裁判が長引くことを考えると、カネミ倉庫は、私たちのような人を

苦しめるために、裁判を争ってきているのではないかと疑いたくなります。

カネミ倉庫には、自分たちの行ったことを素直に反省し、私たち被害者に対して誠実な対応をして欲しいと思っています。

(玉之浦)



(撮影・河野裕昭)

未認定患者の苦しみ

山下 耕一

油症事件が発生してから40年が経って父が認定されました。その間、父と私たち家族の苦しみを少しでもわかっていただきたと思い筆を取りました。

父が認定されるまで、油症に対しての知識(症状)などはそれほど詳しくありませんでした。ただ、小さい時から油症検診に連れられて行っていたので、子供ながらに何か怖い感じはもっていました。その怖い感じを後に自分の体で体験するとは思っていませんでした。

私は、昭和43年、油症が発生した年に、黒い赤ちゃんとして産まれたと母から聞かされました。小さい頃から入退院の繰り返しで、その度に家族に迷惑をかけてきたと思います。

私は現在未認定です。父以外の家族も未認定です。それでも私たち家族が患ってきた症状は、油症患者そのものの症状です。

国は、ダイオキシン濃度の数値だけしか見えてくれません。このような認定基準に対して、強い怒りと失望を覚えます。毎日毎日、認定、未認定の人たちの体は病に冒されています。特に、年老いた人たちは、生と死の間で一生懸命闘っていると思います。体の衰えにかさむ医療費など、肉体的精神的それと経済的にすごく苦しんできたと思います。

このような思いを、私も今からしていかなくتهはいけないと思うとすごく不安と、妻子に対して申し訳なく思っています。

これから、私たち家族がカネミ油症とどういふ風に向き合っていくのか、認定患者を持つ家族として、国、県、市にこの苦しみを強く要望していかなくتهはいけないと思います。

それと、全国にいる未認定患者の人たちが、1日でも早く認定されるような運動をすることが私の使命のような感じがします。

目に見える苦しみと目に見えない苦しみに、全然差はないと思います。油症患者の多くは、その両方の苦しみを味わっている人たちが多くいると思います。私の父も母もその苦しみ、痛みを40年間してきました。それでも頑張って私たち子供5人を育ててくれました。本当に有り難く感謝しています。

油症患者の人たちの苦労を少しでも分かってくれる行政、医療関係者が増えることを切に願っています。皆さんの協力がなければ、先に進むことはできないと思います。

私は、明日も一生懸命生活していきます。時間は止まることはありません。病気も一緒です。どんどん進んでいきます。その事を分かってもらうように、微力ながら活動していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

(玉之浦)